

理科教育にかかわる現状と課題

部長 井澤 和秀

1 理科教育の動向

【上越地区】

妙高市立新井小学校では、県小教研の指定研究(第2年次)の中間発表会を9月29日に行った。研究主題を「言葉と体験を一体化させる理科・生活科の創造」として、思考力・表現力の育成を図る授業改善やカリキュラム整備と開発について研究を進めている。特筆すべきことは、級外職員による理科出張授業をなくし、全てのクラスで学級担任が理科を指導していることである。

【中越地区】

郡市理科部ごとに教材研修会や実践報告会が活発に行われ、新学習指導要領全面实施に向けて、新内容にかかわる教材開発も進められた。

魚沼市では、尾瀬を使った環境学習プログラムとして、市内の5年生が尾瀬に宿泊して環境学習を行った。これに触発され、来年度以降他地域の学校へ拡大する動きがある。

【新潟市・下越地区】

何としても明らかにしたいという強い願いに支えられた理科学習の実現の切り込み口を推論を練り上げる過程の充実に求め、実践に取り組む学校が表れている。また、事実把握の曖昧さに気付かせ、事実を正確に把握する力を育てることを重視する学校も表れている。しかし、理科を校内研究の教科にして実践研究する学校は少ない。

2 理科教育の課題

実際の授業公開に基づいた授業研究会が少なくなっている。理科担当が教務主任、研究主任などの級外職員に限られ、他の若手教員が担当していない学校が増えていることも影響している。このため、若手教員の理科指導経験が増えず、全体的にも実験観察器具の正しい操作方法の習得、実験観察技能の未熟な教職員が増えている。

今後、若手教員に理科指導の基礎を学ぶ研修を設定するなどの工夫が一段と必要となる。中越地区では来年度から魚沼枠による新採用者が増えることから、初任者への理科研修も大きな課題となる。また、理科センター等が行う研修に参加させる校内の体制を整える必要がある。

全体に科学研究発表会への参加数が減ってきている。また、参加している児童も一部の熱心な理科教員や保護者の指導によるものが目立つ地域もある。理科学習の発展としての科学研究に挑戦する児童を増やすことも急務である。